

2004年6月5日
於 東京大学山上会館

社会科学者達よ、ともに台湾史研究に取り組もう！

柯 志明
(張 士陽 訳)

戦後台湾史研究で学際的協力という理念に基づく初めての実践は、考古人類学者の張光直が1972年に主催した国家科学委員会の共同研究計画「濁水・大肚両河流域の自然と文化史の学際的研究計画」である。その後、張光直は学際的な台湾史研究を推進する構想を持ち続け、またこのような研究計画が常設の台湾史研究機構に発展することを期待した。1986年張の尽力により中央研究院に台湾史田野（フィールドワーク）研究室が設立され、中央研究院の人文社会関係の研究所の人的資源が一体となって共同研究計画に参加した。戒厳令の解除と民主化に伴い、台湾社会では歴史の中にアイデンティティーを探ることが切に求められ、台湾史研究ブームを引き起こした。1993年当時中央研究院副院長だった張光直の積極的な主導のもとで、台湾史研究所（籌備處）が正式に設立された。学際的な台湾史研究の理想は組織機構の設立という形で実現した。これにより、台湾史研究は史料の蒐集と整理からまとまった知識体系-意義あるいは価値に即して言えば、主体性史観の発展と構築-を目指すことが次第に可能になったのである。

期待される学際的協力という理想が発展して究極的にどのようなものになるかは、現時点では予想しがたい。私個人は過去の一時期、学際的な台湾史研究に喜んで賛同する社会科学者として多少の体験と観察はあるものの、他人に語るほどのことではなく、再三躊躇したのではあるが、やはり勇気を奮って個人的に困惑した経験をここで率直に語り、切磋琢磨の用に供しよう。

私が先ず直面した当惑は学術の主体性争議から来たものである。学術主体性の係る問題をたどていうなら、即ち誰が同心円の中心となるかという問題であるといえよう。多くの歴史学者にとって、台湾史研究における主体性は自明のようである。ここで現代の社会科学者らは異議を唱えないばかりでなく、事実上相当自己規制し、歴史研究に関わらないという暗黙の了解を注意深く守り続けている。台湾史研究の学際的傾向はこれによってその方向性を持ったのである。学際的研究目指すといっても歴史学から越境することはあったが、社会科学から越境することはなかったのである。にもかかわらず、ここで日本統治期台湾史研究の創始者の多くは実は社会科学者だったこと（著名な例を挙げれば、法学者の岡松参太郎、人類学者の伊能嘉矩、経済学者の矢内原忠雄など）を思い出してもいいだろう。そこで学際的 direction はいったいどのように決められるものかを問いかけるべきであろうか。主体性の議論に密接に関係して次に直面する問題は、社会科学は本当に台湾史研究の助けになるかという問題であることは明らかだ。台湾史研究について言えば、社会科学がそもそも本当に根本的な変化をもたらすことができるだろうか（不可欠な「必要」または錦上添花か（あってもなくともいい「補充」か）。現在、台湾史研究では社会科学の概念と

方法を簡便な道具として用いることは少なくない。反面この種の現象は歴史学者が自己の方法と理論とに対して自信がなく、学術協力は見かけ倒しでわずかでも不注意な場合、批判されることを免れず、学際的研究だと公言しながら、その実、学術資源を搾取する要求ではないかと問いただされる。これだけでなく、多くの歴史学者の心の奥に秘められた憂いが徐々に現れる。台湾史を研究する歴史学者達が本心から社会科学の実際の必要性を信じているかどうかはさしあたり論じないが、何人かの人には学際的研究の経験の中から学術協力を追求したところ、歴史学の主体性が脅かされかもしれないと漠然と意識し始めた時、いつの間にかに「葉公龍を好む」（うわべではある事物を好んでいるようだが、いざ実際に会おうと驚いて腰を抜かす）問題が萌芽しているのである。社会科学がちょうど「鯨呑蚕食」状態にあるという警報は近頃公開の場でたまたま耳にするばかりでなく、個人的にもその警報が蔓延の勢いにあることを強く感じる。たとえこのようであっても、故人である張光直本人は社会科学者だったことに注意していただきたい。ここで議論する価値のあることは、むしろ学術分野の間では何によって主客を区別しているのか、そしてその区分がまたどのようにこのような絶対不変の真理となっていくのかであろう。

さらに具体的に言えば、以上のパズルを解くために、台湾史研究における学際的協力に対する障壁に厳正に直面すると、遅かれ早かれ学術分野の権力構造、心的習性 (*habitus*) およびそれらの形成の歴史過程の分析、すなわち Pierre Bourdieu (1988) が *Homo Academicus* で行ったような分析をする必要が生ずる。但しこのようにすると Bourdieu が明示したように、プライバシーが暴露されたり、あるいはさらに悪いことには、学術闘争の側面からどうしても理解してしまう。私個人心理上このような告発に対してどのように対処するか十分な準備はまだなく、従って一人の社会科学者としての私が台湾史研究と関わった個人的経験から学術分野間で次第に形成された心理状態を討論することに限定するしかない（皆様に気を持たせてしまうことをお許し頂きたい）。

歴史学の「租界」

私は自分がもともと現代社会の研究だけを行って来て、歴史と関わったことがないとはべつに言っていない。それどころか過去に、日本統治期の台湾の政治経済研究に少なからぬ時間をかけたこともある（柯志明 2003 ; Kai1995）。日本時代の資料は相当系統的で完全にそろっており、その上社会科学（社会学、経済学などの学術分野）にとって関心のある研究テーマ（農業発展、工業化、資本主義化など）と密接に関係しあっている。私は台湾の社会科学界（特に経済学界）に最近生じた台湾史熱に特別な注意を払っている。このブームは急速に変動する社会を過去からいくつかの糸口を掴み取り、それによって自己を定位しようとすることに幾分は起因するが、日本統治期の資料の性質が社会科学者を歴史研究に参入させる重要な誘引であることは否定できない。経済学者らが日本統治期の数量データを熟知した数学モデルの中で運用し、自分が好む一般モデルを検証するのを目の当たりにすると、この道理を理解することは困難なことではない。

経済学者とその他の社会科学者達は招かれざる客では決してない。過去の権威主義的統治時期、日本統治期の台湾研究はほとんど民族精神教育の反面教材に成り下がっていた。日本人の一切の

業績を低級と決めつけ、植民地支配について政治化したこの種の分析を行うことを歴史学者自身が多少は嫌悪していたことは注目される。社会情勢と学术界において台湾史研究に対して新しさや変化を求める圧力の下、歴史学者は社会学者を（現代社会に相当近づいた）日本統治期の台湾研究に参入させることに吝かではない。数量データを把握する手法に対して控えめで、また社会科学の一般理論 (general theory) に対して十分な知識を持っていないことなどの部分的な原因で、歴史学者は日本統治期の台湾研究について特定の範囲に自己規制し、社会学者に「相当広い」研究地盤を分け与えてさえいるのであろう。そのため私が政治経済学の名で日本統治期の台湾研究を始めた時、当然ことながら良く覚えているのだが、過去の社会科学の悪しき習慣を改める必要を少しも感じなかったほどである。

日本統治期の台湾に関する私の研究において統計データの使用は別に避けられていない。当然のことだが、既に言及したような経済学の「プレイヤー」達の眼には、私の研究でも取るに足らない技能としか見えない。私自身は、自分の作品がもし本当に歴史学者の注意を引く（あるいは横目で見る）ところがあれば、おそらく一般モデルの理論を導入して歴史研究を行ったことにあると思う。私はここで先ずお断りするが、もしこの種のやり方に罪があるとしても、経済学者やその他の社会学者に比べて私の罪が重いとは必ずしも言えない。少なくとも私は一般モデルを資料に直接あてはめたことはないし、できるだけ注意して既存の二つの一般モデル - 矢内原忠雄の独占資本帝国主義モデル (1929) と川野重任の新古典経済学市場均衡モデル (1941) とを資料を用いて検証と批判とを行った。矢内原と川野とが解決したのは当時の重要な社会経済研究の課題であった。社会学者が一般モデルを用いて現代社会研究するという習慣に従って私が彼等と対話した時、歴史研究を行っているという感覚がなかったことは自然なことだった。

私は彼等二人の先進的理論構造の完璧性に対して十分敬服していたけれども、卵の中の骨をさがすように故意に人の粗捜しをする私は経験資料が彼等の提供した一般モデルに抵触する部分を見つけだし、それから自分のモデルを構築することを始めた。実際には、私の手法は相当単純だった。二人の著名な学者が、東洋の礼儀によって夫婦が賓客に対するように互いに相手を尊重しあい賞賛しあう時、苦心して彼等二人に経験資料と理論上とにおいて真っ向から対立する対話を強引に迫った。具体的に言えば、二つの一般モデルの根本的に対立する（マルクス主義経済学者と新古典派経済学者とが出会う場面を想像してみると）矢内原忠雄には自身の独占資本主義モデルの下の糖業部門から越境させ、川野重任には自身の市場均衡モデルの下の米作部門から越境させ、理論を相手側の研究部門に応用して見た。結果は大変興味深かった。自分が選んだ部門では各々の理論はほとんど申し分ないのだが、ただ相手側の部門では、それぞれの理論は問題が多くて成りたらず、その上独善的であることがはっきりした。直感的には米糖という2つの台湾の主要作物の間には重要な関連がある（少なくとも生態上は明らかであることは分かる）のは当然なことだが、双方の一般モデルはこの関連を残余現象の処理に当てたに過ぎない。この間隙はまさしく私が思いどおりに進入できる場所なのである。戦後ヨーロッパのこの数十年来の発展理論 (development study) 領域における最大の論争はすなわち「新」マルクス主義理論と新古典派経済学理論との間の論争で、私が大学院時代に受けた世界システム (world system) 理論の訓練のお

かげで、うまい具合にこの伝統を受け継いだことに注意していただきたい。

しかし率直に言って、日本統治期について私の研究は抽象的レベルでの大理論上の単なる操作ではない。私が台湾と世界のその他の熱帯植民地の甘蔗農業とを比較した時、最初の強い印象は、台湾ではなぜ、その他の植民地のような大規模農業労働者プランテーション（large-scale labor-hiring plantation）が採用されずに、日本資本の製糖会社が地元の個別農家から甘蔗を買い上げたのか。一般モデルレベルの資本ロジックではこの問題に解答することはできないのは明らかである。私の答えは非常に歴史的なものである。すなわち既存の土着社会経済体系と資本とが相互にこの結果を作り出したのである。これは歴史学の基本的「常識」であり、現在進行中の状況は全て過去に発生した状況の影響を受けているはずである。

しかし私の社会科学者の仲間達がこの歴史学の「常識」の制約を喜んで受け入れるとは思われない。歴史研究に従事する社会学者（正に前述の経済学者のような）は既存の理論を用いて歴史の中で検証する傾向がある。社会科学者はしばしば史料の選択にあまり注意せずに検証して理論仮説を作り上げ、一般法則の有効性を示し、大理論（grand theory）の内包を増量し豊富にする。前述の矢内原忠雄の独占資本帝国主義モデルは糖業部門において現象を把握する理論の有効性と論理の完璧さを十分現している。川野重任の市場均衡モデルも米作部門において同様である。それにもかかわらず、この種の手法は選択する研究対象が制限されるということを免れない。しかし彼等が服膺した大理論を深化させるためには、どうやらこれは支払わざるを得ない代価のようなものである。同様に激しく批判されたことに、社会科学者達はこれまで現段階の経験から歴史現象を概括化し、普遍的な一般モデル（例えば、近代化論ないし教条主義的なマルクス主義によく見られる発展段階論）の内に圧縮しがちだったことがある。歴史研究に従事している時、我々は時間と空間との作用について鈍感である。我々が議論する社会変動モデルはむしろ変遷過程の処理が下手である（あるいは、極端な事例で言えば、統計相関だけで社会変動過程を現し、その叙事的〔narrative〕物語的〔story-telling〕側面を剥ぎ尽くしている）。我々は社会変動が構造的なものであると認識しているのだが、同等に構造もまた絶え間ない変動の中にあることを全く気にも留めないかのようだ。

台湾史研究者が控えめで、研究対象を狭い範囲に制限していることで、私とその他の一般モデルを使用する社会科学者等とが日本統治期の歴史研究に進出する正当性を説明できるかもしれない。但しこれは当然なことだが、歴史学者がこの種の異なる種類の「非歴史的（ahistorical）な歴史研究を喜んで受け入れるということを示しているわけではない。歴史学者が社会科学者に割譲した進入領域を私は戯れに「租界」と呼ぶ。門外漢が租界で尊大に自分勝手に事を進めるのを目の当たりにすることは、歴史学者にとって明らかに愉快的事ではない。しかし、私は歴史学者らと波風も立てずに仲良く暮らすことが出来ると思ひ込み、不注意にも清代台湾研究にまで越境した。この時始めて私は所謂「カルチャーショック」を体験した。歴史学は方法、研究の選択方向及び心態上、過去に私が適応していた社会科学とははっきりと異なる多様な伝統であることを認識した。

鶏同鴨講 (ニワトリとアヒルとの会話)

「租界」の外に出て、治外法権による保護がない歴史学の領土に進入すると、最初の衝撃は歴史学者の「理論」に対する態度から生ずるものである。「本物の」清代台湾史に進入し歴史学と初めて接触した頃、私は無邪気だった。当初、この地で恥知らずにも身の程知らずなことを言い出し、歴史学者を楽しませた。私は当初歴史学者が提供し、処理を待つ「未加工の原料」について、料理人のように社会科学の理論工具で調理すれば出来ると本気で思い込んでいた。当初私は歴史学者が整理した二次資料を用いて、社会科学の理論倉庫から思いのままに利用できる概念と法則とを取り出し、理念型 (ideal-type) を大胆に駆使して歴史学に適用できると想定した。私の身の程知らずを性急に責めないでいただきたい。多くの著名な社会科学者の方法論から同様の見方を探し出すことは可能である¹。質的資料をコンピューターで処理可能な数量データに強引に転換する手法と比較しても、まだ穏健な手法だと自覚しているが、理論を適用する手法から言えば、私もまた五十歩百歩である。

忌憚なく言えば、私の歴史研究は歴史を理論化する(theorizing history)意図から始まった。この種の立場から歴史研究を始めた社会学者は歴史学と社会科学とが既にほとんど独立した別々の学術分野であるという事実遭遇することは避けがたい。我々社会科学の先駆者達にはこのような問題がなかったことは明らかである。彼らは歴史研究のみを行ったわけではなく、多くの場合、彼らが果たして歴史学者であるか社会学者であるか区別することは大変困難である (Burke 1922:4-11)。彼らには明らかに想像もできないことだが、今日の社会科学と歴史学との境界は意外にも明確で、ひいてはコミュニケーションもできず、Fernand Braudel の悲痛な「聴覚障害者間の対話」(the dialogue of the deaf) 即ち台湾の俗語で言えば「鶏同鴨講」(ニワトリとアヒルとの会話) でこの状態を形容できる (Burke 1992: 3; Braudel 1980: 64-82)。歴史の理論化という私の意図はここからの最初の衝撃を受けたのである。

社会学者について言えば、歴史学者は先人の活動を再現することを理想とし、因果構造的な思考ないし概念の使用を排斥する。歴史家の作品には表面上因果関係を陳述したものもあるが、社会科学の標準的な研究から見れば、実は事件発生の順序を陳述したに過ぎない。反対に社会学者が歴史研究に従事するとき、往々にして歴史学者から緻密さに欠けるとか、足を削って履物に合わせるように無理に既成の条件に合わせていると批判されるのである。その理論構築は硬直的で不自然で、当時の具体的な社会的事実と違反しなければ不当にも簡略化してしまうと歴史学者から見られている。

理論と歴史とが明確に対立するのは本当だろうか。まず弁明しなければならないことは、歴史学者は実際に研究を行う上で、理論を必ずしも排斥しているわけではない。理論の使用者が自覚しているかいないかに関わらず、史料がオリジナルの混乱状態を呈していないなら、おそらく概念はとっくに入り込んでいるはずなのだ²。実際、台湾の歴史学者は無意識に「実用主義」方式で社会科学理論 (例えば現代化) の概念) を使用しているのを発見するのは困難なことではない³。歴史と理論との対立というのはあまりに極端すぎる説明のようだ。わずかばかり正確に言えるこ

とは、理論に対する歴史学と社会科学の「態度」とに異なるところがあるということである。社会科学の「普遍化」の理論傾向に対して、歴史学者は「特殊化」によって史料を処理する性向がある。特殊化傾向の極端なやり方の例として地方偏重主義（parochialism）があげられる。地方偏重主義は研究対象の特異性を強調し、自分の研究対象は他の研究対象とは「本当に」異なると思える。我々社会学者は、異なる現象間に実際にはいくつかの基本要素が分かち合い、その組み合わせによって異なる現象が生ずるに過ぎないと信じる傾向がある。地方偏重主義の作品は社会科学者から言えば、生で未処理の研究で、他の事例との比較あるいは適用ができない、簡単に言えば、「出来の悪い」社会科学的研究である。私の最初の衝撃は、具体的に言うと、特殊化と普遍化という二種類の研究手法間の格闘から来ている。

聚宝盆の悪夢

博物館の最大の悪夢は古物の収蔵が知らず知らずの間に制御できなくなり、古物の堆積が日々増加してどのように処理するかわからず、廃棄処分することのできない収蔵品は不断にさらにひろい博物館の収蔵空間を求めて、博物館員は奔走し疲れ果てるといふものである。聚宝盆（いくら取っても尽きない宝物を盛った鉢）の童話に譬えるなら、聚宝盆は必要な物に変化することができ、不幸にもある日突然、自分が残した呪文を忘れてしまう。そこで…。私の歴史研究はここから第二の衝撃に遭遇する。

歴史研究は歴史を再構成しなければならない。但し歴史を再構成することは過去に発生した全ての現象を再現しなければならないことを意味するのであろうか。時間や史料の制約で実際にはこれは不可能な作業である。現実的に考えれば、必ずある地点に止まらなければならない。しかも少し誠実であれば、たとえ歴史学の中で、この境界線が時間と精力との限界によって引かれたものではないことを私は信じている（けれども英雄の悲劇的な様子はこのとおりであると揚言することを私は否定しない）。理論の重要性はこの一点で増す。歴史学者は確実に必ず理論の導引、たとえ「広義」の理論であっても（何人かの歴史学者は、「理論」というこの用語の代替として、「旨趣（テーマ）」という用語を好んで用いるかもしれない）に頼らなければならない。そうでなければ、果てしない史料収集陥り、疲れ果ててしまうであろう。これは理論を必要とする最初の重要な理由であり、「なさんと欲するところを知りて、なさざる」という実用的理由である。

理論が存在する理由は我々の限られた時間と精力とを節約するためだけにあるのではないことは明らかである。歴史研究の目標がもし過去の大きなことや些細なことを残さず再現することにあるならば、研究者が直面するであろうことは、永々に終わることない史料収集作業だけでなく、別の重要な問題、たとえ完全に歴史的事実を再現できたとしても、これで知識を求め疑問を解きたいという願いを達成したのであろうかという問題である。歴史学に比べ社会科学の研究対象は現代社会で、研究者の関心は社会的事実の再現だけではなく、さらにこれを解釈することにあることは当然なことである。我々は、我々の研究対象である現代人が必ずしも自分の帰属している社会を理解しているとは限らないということを仮定しなければならない。そうでなければ社会科

学者はとっくに失業している。同じ理由で、当事者が正確に判断でききないため、あるいはわずかな局部的経験の有しているだけで、過去の人々が自分の社会に関する理解が（現代の研究者に）比べて必ずしも深く掘り下げた完璧なものとはいえないのである。死者を復活（古代を現代に変える）させてもこの問題を解決することはできない。もっとも可能な歴史的事実の再現でさえ研究者がこの問題を解決する助けになるとは思われない。資料の数値を強調ばかりで、理論を通して適当な切り込む視角を提供しようとしなければ、過去を深く理解する助けになるとは限らない。私を当惑させることに、歴史学者の史料蒐集に対する興味が論理的に説得させることを通常遙かに越えていることにある。歴史学者は新出のあるいは他の研究者の持っていない資料を手に入れることに常に集慮しており、社会学者は、複雑に錯綜する史料の中で道に迷い自力で抜け出せなくなることを避けるための適切な理論を見つけだすことに焦慮する。後者は私が永く止むことない集慮であり、私と歴史学との接触の第二の衝撃を作り上げている。

歴史研究は歴史的事実の復元であるだけでなく、歴史的事実の再構成でもあるあるからには、この面で史料の戦略的選択に必ず影響を及ぼすはずだ。史料はおびただしく無限であり、歴史研究者はただその中のほんの一部を取り出せるだけである。研究のために取り出した部分の史料が問題設定や理論と直接関連すると仮定する。ただ取り出さなかった部分も理論と関連するところがあると、その中におそらく歴史研究者の盲点があり、また歴史研究者が間違える場合もあれば、僅かではあるが新理論が生み出される契機もある。研究者は理論的関心からの啓発と理論的命題とによる導きを受けて史料を収集するのだから、収集した史料は単純な史料の累積などではない。理論の導きのもとで、研究者はまず初歩的に史料をふるいにかけさらに消化する。この作業は史料そのものについて系統的に整理する作業（資料整理作業）だけではなく、実際には理論的命題の訓練の準備状況にあるのである（私は Robert K. Merton [1987: 2-6] に基づいて、この順序を「現象確証」[establishing the phenomenon] と呼ぶ）。これは一部をもって全体を評価するという目的にあわせようとして、研究者が選択的取材を行い、任意に取捨選択できるといつているわけではない。「現象確証」の過程で研究者は批判的精神で資料と向き合い、理論的命題に抵触する資料に特別注意する必要がある。なぜならこれらの資料には理論の修正と細緻化をもたらす可能性があり、理論の基本命題に挑戦し代替（alternative）の理論をもたらす可能性さえあるのである。

資料収集の現象確証と資料の単純な累積とは違いがあり、量で勝つのではなく、論証を完成するのに必要な資料が完全にそろっていて周延であると判断できるほど収集されているかどうかである。これは必要な資料の量が比較的少なければ、かける労力も比較的少なくなるだろうということを決して示してはいない。なぜなら必要なものは蕪雑なものを除き精華のみをとどめる資料だからである。良い場合を考えれば、歴史学研究が社会科学に利用可能な大変多くの原史料を提供する。悪い場合を考えれば、歴史学者が提供する史料の多くが関係のないあるいはうまく利用できない史料であると、最後には我々社会学者がやはり自ら史料を集めに海に出なければならぬ。

これだけ説明しても、まだ以上の説明がほんの口実に過ぎず、せいぜい歴史学を原料提供者と

する初歩的で幼稚な見方から、歴史学の提供する史料がどんなに不適當な原料であるかと不満を言っているに過ぎないのではないかと問いただされる。かくの如くであっても、私は自分でばつが悪さをごまかして言えば、よい食材のない料理人はどうやって美味しい料理を作れるだろうか。私が思うに、私の問題は実際には「いかにやりくり上手な嫁といえども米なくして炊事することはできない」ことに比べてもいっそう深刻である。私が何を根拠に自分が資格のある「料理人」とであると公言できようか。

工具を見つけだせない工具箱

私は社会科学による歴史研究とは理論を歴史に適用することであるとは言っていないが、ただ確かに Charles Tilly による既存理論を歴史研究に応用する手法を十分理解している。社会科学は歴史研究の工具箱で、彼は次のように述べている。

歴史研究作業において、社会科学は相当重要な潜在的地位を有している。さらになんと言っても、社会科学はあたかも巨大な倉庫のように因果理論と因果類推とを含む概念を提供し、我々が方法を講じて使用に堪える物の組み合わせを検取して売りさばける商品を思いつきのを待っているのである（Tilly 1981: 12）。

「歴史の教訓とは、すなわち人類が歴史の教訓を心に銘記することが永遠にできないことである」という雅俗共賞で知恵の充満した諺語を信ずるなら、これは解釈されることを待っている歴史の問題は歴史の中で繰り返し現れているはずであることを意味する。もう少し簡単に言えば、歴史に従うべき法則があると信じられているのであろうか。もし信じられているならば、繰り返し発生する歴史の問題からその常則（regularity）を見つけだそうと試みる過程で、たとえ良くない理論であっても、プラス的作用があることもある。理論によって必ず問題の範囲が画定され、問題解決の方法と困難さが明らかになり及び問題解決の基準が確立され、最後に答案が提供される。またもし不幸にして失敗したとしても、処理の過程及び誤りの記録は残されるのである。もし誰かがあなたを助けて先に問題範囲を画定し、理論が正しいか間違っているかに関わらず、処理過程の使用ハンドブックを提供してくれるなら、きっとあなたも私と同じように先に試して見たいと思うだろう。たとえ良くない理論でも少なくとももう一步改善するための飛び板を提供するのである。「良くない工具でも手に工具が無いよりはましである」と Tilly は言っている（1981: 12）。

理論概念から史料に到り、史料から理論概念へ戻るという作業は不断に修正を繰り返す過程である。純粋な概念が具体的な歴史上の事例で例証される場合、しばしば例証不能な状況に遭遇して、概念例証から逸脱し再三修正を迫られる。修正は歴史状況に対して理論構築をする時に、しばしば発生する状態であり、もし再三の修正が最終的に理論構築上の一致性に到達するまで継続することができなければ、その理論は結局瓦解するであろう。ただ本当に優れた理論構築の検証は困難ではないはずであり、抽象的レベルの概念は歴史状況の中で不断に自己の内容を活性化し

充実させているのである。

理想は以上のごとくであるが、おそらく悪い工具を使用したり、あるいは抽象概念と具体的歴史事実とをむすぶ時に処理が妥当でなかったことのほかに、なお私が引き受けなければならない直面した問題はこれだけではなかった。清代平埔族岸裡社を事例に講演した際に、私は年輩の同僚から「この題目はどのような意味で社会学の研究題目と言えるのか」と質問された時、こともあろうに「私の研究題目は国家・族群と社会生産関係等で、社会学の理論でずっと関心が持たれている題目のはずです」という自己弁護をすることしかできず、一言の「社会学理論」も答えていなかった。私はこの時、社会学理論の工具箱の中に貯えられてきた工具の大半はもともと「現代」社会をあるいは「資本主義」社会を処理する工具であったことに初めて気づいたのである。社会学理論の工具箱から私が研究する清代台湾に関連する理論を見つけだすことはやはり本当に困難だった。工具箱には Tilly の保証する大量の貯えがあるものの、不幸な事に、工具箱の中に清代台湾を研究するための工具を見つけだすことはできず、そのため「これは社会学の研究と呼べるのか」という詰問を受けることになった。ここに至って私は第三の衝撃を受け、腹背に敵を受け進むもならず退くもならず、進退窮まる状況にあることに気がついた。

これはそれでも社会学と呼べるのか？

これはそれでも社会学と呼べるのか？「社会学の工具箱にはない」、「社会学の工具箱から取り出せるのか」というこのような立場は、Tilly の用いた立場のようではなく、実は「実用主義」の「悪い工具でもないよりましだ」という立場と言え、断定的に言えばこの立場は明らかに社会学のようではない。社会学と歴史学との決裂とは、この基準から言えば、理論と歴史との分断だけでなく、さらに不幸なことには、「所謂社会学理論」と歴史との分断なのである。もし理論的工具を見つけようとするならば、どうか必ず社会学と楷書されたスタンプが押されている理論工具を使用していただきたい。

幸運にも私はそれほど孤独ではない。Arthur L. Stinchcombe は深遠な影響力を持つ方法学の大作 *Theoretical Methods in Social History* の冒頭で、「もし私が社会学理論を史料上でどのように運用しても、いつも提出されるこの問題がこのようにでたらめであると私が感じたのでなければ、私は本書あるいはその他の歴史方法に関する著作を書こうとしなかったであろう」(1978:1)。彼は我々に「歴史を使用して理論を生み出させよう」とし、一般社会学者の研究のように理論から歴史を生み出す必要はないとする(1978:1)つまり自分で工具を発明する必要はあるが、いつも社会科学の工具箱から探し出そうとする必要はないというわけである。彼はこの本を歴史現象の異同を比較する方法を用いて、顕著な因果類推 (causally significant analogies) を抽出し、歴史理論すなわち自身発明の工具を作り出す⁴。

社会事象の間に類似した原因と類似した結果とがある場合、それらの事象から類推を捜しだすことが可能である。Stinchcombe によれば、整理しようとする類推は「それらは人々がしたいと思うこと及び、人々がどのようにすれば達成できるかを認識している」という共通性が貫かれてい

るという。ここで通俗的な比較事例で彼の類推法を説明させていただこう。労資間の関係と紛争とは多種多様の現象様式があるが、労資双方は特定の相互関係の鎖で繋がれていて、あるいは私が比較的好む表現だと、衝突の特定の戦略的位置上にあり、双方とも自己の置かれた戦略的位置と密接に関係する利益とによって行動を選択すると整理することができる。例えば収入（賃金対利潤）や作業時間と作業過程の割当とを争議するのである。同じ理論で清代台湾における清朝・漢人・平埔族・高山族間もまた類推法によってその特定の配置を見つけだせるはずである。Stinchcombe が好む歴史分析は単一の特定の歴史事象そのものの分析に留まらず、既に類推法によって整理した多数の歴史事象についてさらに処理を行い、これらの歴史事象間の時系列について因果関係を構築する。特に注意していただきたいのは、彼の関心は多数の状況下でこの時系列が連続して重複して出現することを信じさせることにあるわけではないことである。彼が本当に心に留めているのは「一つの歴史事象が次の歴史事象の成立条件となる」因果関係を構築することである。

我々は Stinchcombe の歴史学に対する批判が比較的穏健であろうと見なしてはならない。上述の彼の基準に従って述べれば、「深い」類推法（deep analogies）によって歴史事象を復元することなく、直接歴史上の事件について因果時序を説明する手法では、ただ事件の表面を掴むことしかできない。Stinchcombe から見れば、多くの歴史叙事（narrative history）的分析は徹底的に調べ上げるが、事件発生の先後の順序を示すだけなのである。その上、詳細な研究では、政治上の重要人物の意図と影響力とを過度に解釈するのではなければ、一種の運命論的意味を帯びた大理論に密航して、歴史上の事件の展開をある種の主導的力または法則の自己発展と見なす。

Stinchcombe が特に嫌悪するのはやはり社会学が大モデルを歴史に強引に当てはめる手法である。彼は社会学が誇る社会変動理論に対して容赦せずに「社会変動理論はこのような空洞の一般観念（general notion）から構成されたので、単純な社会変動研究に比べても大変つまらない」と批判し、「この種の空洞観念はただ序文と結論とを書く時に有用である」と述べている（1978：116 - 117）。

Stinchcombe 理論構築法の特色を社会学が大型モデルを当てはめる手法と比較してみると、彼自身が挙げた「大工と建築家」の類似を用いるのが最も的を射ている。すなわち「構築理論は仕事をしながら巻尺墨つぼで測り調整する大工仕事と同じで、先ず設計をしてから設計図どおりに施工する建築家の仕事のようにではない」（1978：122）と述べている。

「楷書スタンプ」の押された社会学こそが社会学と呼べるのか？もしそうなら、率直に言って、私は社会学者と呼ばれても歴史学者と呼ばれても全く気にしないだろう。もし社会学者が歴史研究を許される、あるいは（創始者のマルクス、マックス・ウェーバーらのように）その資格があるならば、歴史学と社会学とに果たしてどのような実質的差異があるかを区別しようとすることは本当に困難である。もし無理に区別しようとするれば、個別学術分野で長年形成された心理状態に押しつけるしかないだろう。

和は勧めるが分は勧めず

Alexis de Tocqueville はもっとも単刀直入な方式で社会科学自慢の大理論を修正している。

私としては、次のようなすべての絶対的体系を憎悪する。絶対的体系は歴史上の事件をただ運命の鎖で連結された偉大な主要原因に従属させ、人を人類の歴史から追放することに成功した。……自己の空虚さと抜け目さとを覆い隠すために輝かしい理論を發明した作者を相手にしてはいけない。私は多くの歴史上の重要事件は意外な状況からだけで説明でき、またその多くは解釈できないこともあると信じている。(Tocqueville 1987 : 62)

しかし、その後やはり次のように認めている。

もし事前に準備がきちんとできていなければ、偶然はいかなる作用も生み出すことはできない。以前の発生した事件、制度の性質、心理状態の変化、道徳状況が材料を提供し、偶然がその驚くべきまた震撼させる即興芝居を演じる。(Tocqueville 1987 : 62)

偶然はすべての状況が十分に準備された時、はじめてその「驚くべきまた震撼させる」スタイルの「即興」芝居をするだろう。歴史研究の中に社会科学が割り込めるなんらかの隙き間があるならば、たぶんその隙き間に入っているだろう。つまり我々は理論を通してあの偉大な演技をする舞台を組み立てる。このようにすると、偶然上演時の意外な「驚き」が低下するかもしれないが、「震撼」する部分はいささかも減らない。歴史制度の内包の本質が心によって明確に理解されている状況のもとでは、人の意志、道徳の勇氣、ないし絶望のものがきはそれによって、さらに人心を震撼させるやり方で現れる、特に我々の祖先や親戚が参加する歴史劇において。

社会科学は歴史学と分化すると次第に専門化し、一般理論を使用して現代社会の学術研究を行ようになった時、多くの現代の社会科学研究者は、時間・空間を重視したため、再び歴史研究に対する関心に火をつけた。事件がどのように変化していくかということと、その事件が結局特定の時間上に発生したことが限りなく関連することが認識された時、我々社会学者にとって歴史は再び極めて重要なこととなる。私のように無意識のうちに歴史研究にはまり込み自力で抜け出せないあるいは抜け出そうとしない社会学者は、多くのカルチャーショック、焦慮、挫折を経験したにもかかわらず、心にいつも楽観的期待を抱き続けることでなんとか研究を継続することができた。社会科学と歴史学との間の関係は、一方が境界線を引いて領土を割譲しこれまでどおり互いに自分勝手に研究する状況では、改善されることはないだろうと思われる。ただ両者の関係が真に建設的に発展することを信じたい。この変革は社会科学と歴史学とが奇跡的に互いに意気投合することで実現されるのではなく、過去の互いに遠ざかる傾向を是正することができるかどうかによって実現する。社会学者たちよ、ともに歴史研究に取り組もう！

- ¹ 詳細な議論は Philip Abrams(1972)と Charles Tilly(1981)とを参考のこと。
- ² ポストモダン思潮は史学の著作のテーマの中に潜んで大いに論陣を張っているではないか。
- ³ 歴史学が社会科学の概念工具を活用することについては、歴史学者には保留する強い考えを持つ者もいて、そのような考えの歴史研究者は社会学者が立場を変え「鯨呑蚕食の野心」を持っていることに気づくべきだと仲間に強く警告する。しかし、詳細に調べれば所謂「鯨呑蚕食」はたかだか歴史学者が社会科学の量販倉庫の棚から無造作にすぐ利用できる商品（その中には長期保管の古い品物も少なくないが）を取り出すという現象に過ぎないのであり、一部の歴史学者はこのように臨機応変に処理するやり方で社会科学の概念工具を使用し、与えてくれたものや、役立つところはみな用いようとするが、これは、困難なことではないだろうか？不幸にして引用を誤ったり、工具の使用が不適切であったりすれば、社会科学は歴史学が失敗した理論的試みのスケープゴートになってしまうのだ。
- ⁴ 比較同異による構築理論についての簡要な説明は Theoda Skocpol[1984:378-379]による Stuar Mill の「求同方法」(method of agreement) と「求異方法」(method of difference) に関する解説を参照していただきたい。

参考文献

- 矢内原忠雄, 周憲文訳 1985 [原著 1929] 『帝国主義下之台湾』, 台北市, 帕米爾書局。
- 川野重任, 林英彦訳 1969 [原著 1941] 『台湾米穀経済論』, 台北市, 台湾銀行経済研究室。
- 柯志明 2003 『米糖相剋—日本殖民主義下台湾的發展與従属』, 台北市, 群学出版社。
- Abrams, Philip 1972 The Sense of the Past and the Origins of Sociology, *Past and Present* 55:18-32.
- Bourdieu, Pierre 1988(1984) *Homo Academicus*, translated by Peter Collier. Stanford: Stanford University Press.
- Braudel, Fernand 1980 History and Sociology, in his *On History*, pp.64-82.Chicago:The University of Chicago Press.
- Burke, Peter 1992 *History and Social Theory*. Cambridge: Polity Press.
- Ka, Chih-ming 1995 *Japanese Colonialism in Taiwan: Land Tenure, Development, and Dependency, 1995-1945*. Boulder, Colorado: Westview Press.
- Merton, Robert. K. 1987 Three Fragments from a Sociologist's Notebook: Establishing the Phenomenon, Specified ignorance, and Strategic Research Materials, *Annual Review of Sociology* 13: 1-28.
- Skocpol, Theoda 1984 Emerging Agendas and Recurrent Strategies in Historical Sociology, in *Vision and Method in Historical Sociology*, Theoda Skocpol ed., pp.356-391.Cambridge University Press.
- Stinchcombe, Arthur L. 1978 *Theoretical Methods in Social History*. New York: Academic Press.
- Tilly, Charles 1980 Sociology, Meet History, in his *As Sociology Meets History*, pp.1-52.New York: Academic Press.
- Tocqueville, Alexis de 1987[1850] *Recollections:the French Revolution of 1874*(Translation of Souvenirs), J.P. Mayer and A.P. Kerr eds, translated by George Lawrence. New Brunswick: Transaction Publishers.